

農林水産省 食料産業局長賞

フードバンク提供促進の先進的な取り組み



株式会社ハローズ

<取り組み内容>

株式会社ハローズでは、1店舗で毎日5～10kgの食品ロスが発生していた。

廃棄削減を担当する商品管理室長は、「食べられる商品を廃棄するのはもったいない」という従業員の声を聞き、廃棄商品のフードバンクへの提供を考えた。

取り組み当初は、店舗で販売できない商品を同社物流センターに集め、フードバンクに登録している施設の方に取りに来てもらうという方法だった。

しかし、提供量が多くなり、仕分作業などフードバンクの負担が大きくなったため、**フードバンクと契約している支援団体が、近くにあるハローズの店舗に直接引き取りに来る仕組み「ハローズモデル」に変更した。**

ハローズの店舗は24時間営業をしており、夜間勤務者が消費期限をチェックしてフードバンクに提供する商品を朝までに準備する。店舗にはあらかじめフードバンクと契約している支援団体が取りに来る。

2017年に障害者就労支援施設を運営している一般社団法人 アリス福祉会が保管設備を備えたフードバンクを独自に立ち上げ、施設を利用している障害者が周辺の利用者の分をまとめて**毎日取りに来て分配**するという新方式「**アリスモデル**」が加わった。

フードバンクでは破損品や消費・賞味期限が長期残っている商品が主力となるが、毎日取りに来る事から、これまで提供できなかったデイリーフーズ商品、農産品、加工肉や消費・賞味期限が短期の商品も提供できる事が可能となり成果が一段とあがった。

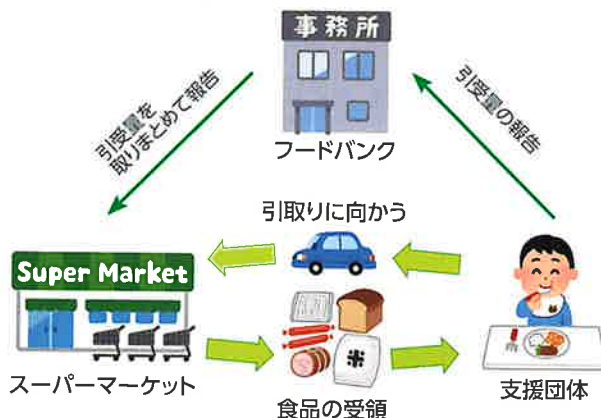
2018年9月現在、ハローズの全80店舗で実施、**毎月約1,000ケース、5tがフードバンクに提供**されており、ハローズとしての廃棄ロスも削減された。



▲ハローズ羽島店から支援団体へ食品引き渡し

ハローズモデル

フードバンクと契約を締結した子ども食堂等の支援団体が、近隣の店舗へ直接引き取りに向かう



今回の取り組みについて株式会社ハローズ 商品管理室長 太田 光一様にお話を伺いました。

Q ハローズモデルのキーポイントは何ですか

A 1度物流センターに入ってしまうと、その後商品整理、保管、搬出などの手間がかかりますが、フードバンクと契約している支援団体が直接私たちの店舗に毎日取りに来ていただける事で効率が格段に上がりました。更に、デイリー商品も提供できるようになった事です。

Q 今後はどのように発展させたいと考えていますか

A ハローズでは全店、天満屋ストア様、山陽マルナカ様でもハローズモデルでフードバンクへの商品提供を実施されています。これが全国の各スーパーに広がっていけばと考えています。

Q 事例発表の会場で従業員教育に関する質問がありました

A 従業員には食べられる物を捨てるという罪悪感が強くありましたが、フードバンクを利用する事でこの罪悪感からも解放されモチベーションも上がり協力してくれます。特別な教育は実施しておりません。

Q ご苦労なされた事はありますか

A 最初はそもそもフードバンクについて知識が無かったので勉強する事からのスタートでした。調べてみると、意外にもフードバンクに登録している支援団体が少なく、協力を呼びかけ商品提供のネットワークをハローズ全店舗に展開を広げていくことに苦労しました。



▲商品管理室長 太田 光一様